

「水子貝塚 一まもり、伝える縄文のムラー」

■開催にあたって 水子貝塚は、明治期に発見、昭和期（戦前）には発掘が行われ、奥東京湾の貝塚研究とともに、縄文時代の集落研究などに大きく寄与してきた遺跡です。昭和42年1月の発掘調査を契機に、環状集落全体を保存するため昭和44年9月に国史跡に指定されました。その後の史跡の公有地化と、平成になって保存と活用を目的とした整備を行い、平成6年6月には「縄文ふれあい広場 水子貝塚公園」として開園しました。

令和元年は、水子貝塚の国史跡指定50周年、公園開園25周年の節目の年になります。

令和元年度企画展では、明治期の発見から昭和期（戦前）の発掘、国史跡指定の契機となった発掘関連資料、史跡整備に伴う発掘資料など、水子貝塚の歴史を振り返るとともに、史跡公園として整備されてからの活動について紹介します。

1 発見と発掘の始まり

(1) 明治・大正の発見

■明治期の発見・報告

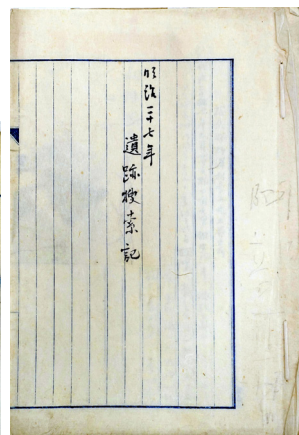
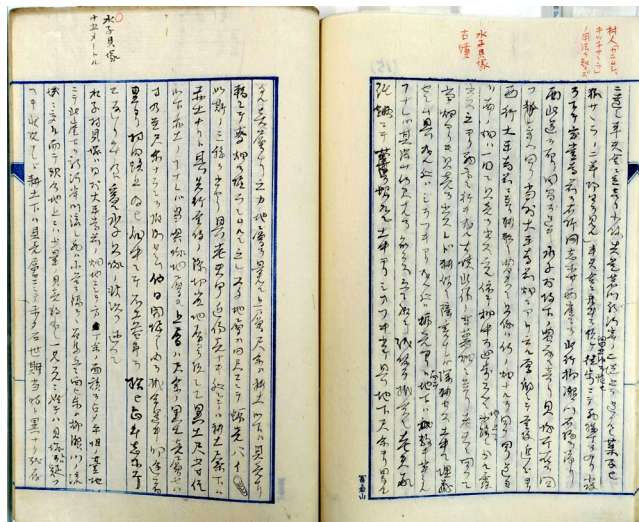
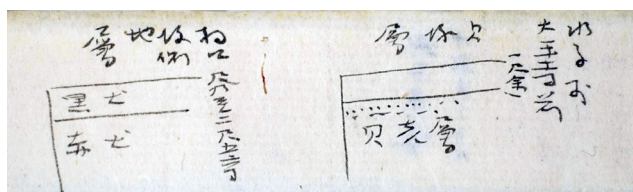
水子貝塚は、明治27年（1894）10月、阿部正功^{あべまさこと}によって発見され、『東京人類学会雑誌』第10巻第106号に貝塚山遺跡とともに紹介されました。これまでは、大正期に発見されたのが最初とされてきましたが、新たな資料が発見され、水子貝塚の発見は明治期に遡ることが明らかになりました。

阿部は、陸奥国棚倉藩最後の当主で、明治に入り華族（子爵）に列せられた人物です。幼いころから学問好きで、遺物・遺跡に深い関心を持ち、明治20年代、主に東京・埼玉・神奈川県^{（注）}の遺跡を訪れ、記録し、人類学会で発表しました。坪井正五郎や鳥居龍蔵等、当時の学会の人々とも交流し、自宅に作った陳列館で収集した資料を展示していました。

記録によると水子貝塚の発見は、10月19日に貝塚山遺跡を踏査した6日後の10月25日です。武蔵国各郡内の貝塚踏査として訪れたようです。浦和からは人力車、秋ヶ瀬では渡船に乗り、近くの農民から「大王（応）子前畑」があることを聞き水子貝塚を訪れました。畑を歩き100m四方以上に広がる地点貝塚を確認しました。そして、農夫に試掘を依頼し、1尺ほどの黒土下に貝層があり、貝はシジミ、ゴウラ（タニシ・カワニナ等の巻貝）、カキであったと記しています。



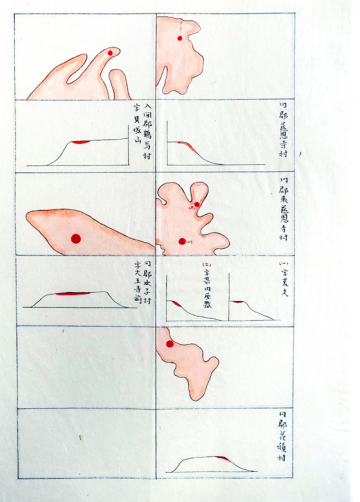
1. 阿部正功 小峰城歴史館蔵
明治24年（1891）撮影、31歳



2. 明治27年遺跡踏査日記

個人蔵（学習院大学史料館寄託）

「入間郡志木町遺跡踏査日記」として水子貝塚の踏査が記されています。試掘した際の土層略図は枠外に描かれています。



3. 武州各地貝塚発見位置略図

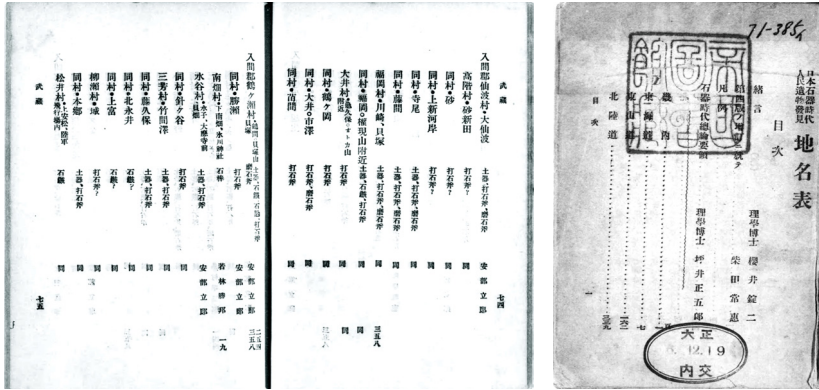
個人所蔵（学習院大学史料館寄託）

阿部正功の調査した各地の貝塚が地形とともに描かれています。

■大正期の発見・報告

大正デモクラシー期における川越地方の知識人であった安部立郎^{あんべ たつろう}は、郷土史家の一面も持ち、入間郡内の考古資料や板碑等の資料を精力的に収集していました。

大正6年(1917)の『日本石器時代人民遺物発見地名表(増訂第4版)』には、安部を報告者として貝塚山、勝瀬、水子・大応寺前貝畑、針ヶ谷、南畑(氷川神社の石棒)の5カ所の富士見市内の遺跡・遺物が記されています。



4. 安部立郎
川越市立博物館提供

5. 『日本石器時代人民遺物発見地名表』
(増訂第4版)
国立国会図書館デジタルコレクションより

(2) 貝塚研究、集落研究のための発掘

■第1次調査

関東地方の貝塚を主に研究していた酒詰仲男^{さかつめなか お}は、昭和12年(1937)に安部立郎の報告から水子貝塚の存在を再認識し、昭和13年(1938)12月16～26日にかけて東京考古学会縄文式部会として和島誠一^{わしま せいいち}とともに2カ所の貝層を伴う竪穴住居を発掘しました。土器は竪穴住居からは黒浜式、貝層上から諸磯式土器、石器は磨製石斧や打製石斧、貝はシジミが主体でカキが混じる、動物はシカ等、魚はスズキ等が出土したことが報告されています。16カ所の地点貝塚が馬蹄形に分布する状況が示されました。

■第2次調査

昭和14年(1939)10月には、最大の地点貝塚とそれに伴う竪穴住居を発掘しました。この発掘も酒詰と和島を中心に行われました。11月には水子貝塚調査時に踏査して発見していた打越貝塚^{うちこし}で貝層を伴う竪穴住居を発掘しました。

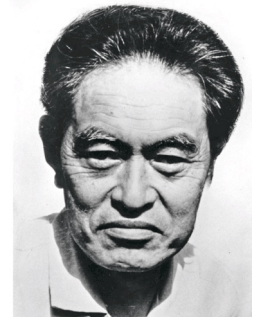
これらの調査は、縄文時代前期の地点貝塚が竪穴住居に埋まりかけた凹みに遺棄されていることを確認するとともに、これを追っていけば結果的に集落の全容を明らかにすることができる見通しがたてられた遺跡として評価されています。



8. 発掘現場での記念写真(1次調査)
中央のスーツ姿が酒詰、その左前は乙益重隆。



9. 大応寺本堂前での記念写真(1次調査)
前列左端は山内清男、中央列左から和島、篠崎善之助、2人あけて乙益、後列左から長田実、酒詰、江藤千萬樹、1人あけて江坂輝彌、篠崎四郎、丸茂武重。



6. 酒詰仲男(1902～1965)
先史時代の生活の復元を目標として貝塚を中心に研究し、『日本貝塚地名表』、『日本縄文石器時代食料総説』等貝塚研究に不可欠な基礎資料を残しました。戦前の水子貝塚1・2次調査の中心人物です。東京帝国大学人類学教室等を経て同志社大学文学部教授。

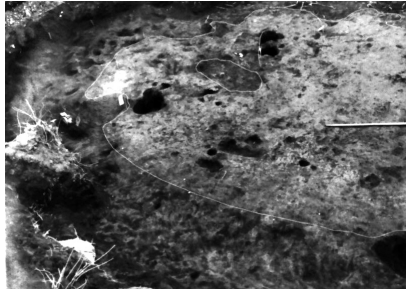


7. 和島誠一(1909～1971)
史的唯物論の立場で原始古代の集落研究で業績を残しました。1～3次調査に参加し、集落研究と縄文海進の研究で水子貝塚を取り上げました。また、文化財保存運動や日本学術会議等各種学会でも活躍しました。東京帝国大学人類学教室、資源科学研究所等を経て岡山大学文学部教授。



10. 1次調査・1号住居

「第1号竪穴床上的カキの状況」のメモ。
1号住居の発掘は主に和島が担当しました。



11. 1次調査・1号住居

「第1号竪穴 白線内は床面 中央の白線内は焼灰の範囲 ステッキは南北を示す」のメモ



12. 1次調査・2号住居

「第2号竪穴」のメモ。2号住居は主に酒詰が担当しました。



13. 1次調査・2号住居

「第2号竪穴 貝層及び黒浜式土器出土状況」のメモ。



14.

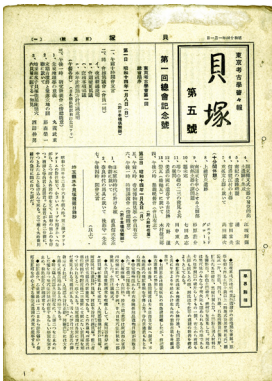


15.

14・15. 1次調査資料
國學院大學博物館蔵

昭和13年の発掘資料の一部が國學院大學博物館に所蔵されています。この調査には多くの國學院大學の学生が参加しました。

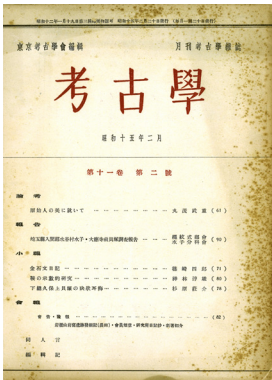
14は『考古学』11-2の巻頭第4図版(18の左上の土器)と第10図1に掲載された土器。15の土器裏面には、年月日・地点・層位が書かれています。



16. 『貝塚』第5号

個人蔵

第5号・6号に1次調査の「水子貝塚調査日録」が掲載されており、当時の発掘の様子を知ることができます。

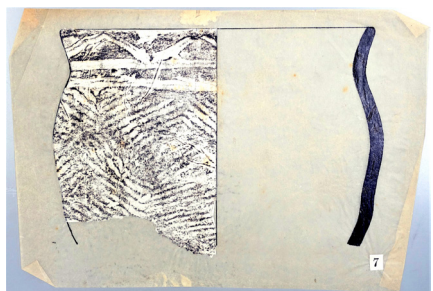


17. 『考古学』第11巻第2号

1次調査の報告が掲載されています。



18.



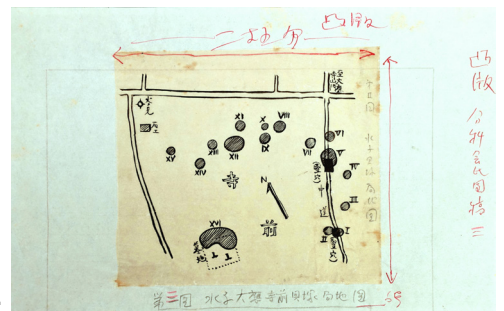
19.



20.



21.



22.

18～22. 『考古学』第11巻第2号掲載図版 諏訪市博物館蔵

藤森栄一資料に水子貝塚報告図版の一部が残されています。18は巻頭第4図版、20は巻頭第3図版の1号住居(第1号竪穴)、21は本文第2図の調査風景、22は本文第3図の貝塚分布。貝塚が馬蹄形に分布する図は戦後も使用されていきました。19は第10図7。

2次調査は、昭和14年（1939）10月18～31日に東京帝国大学人類学教室（長谷部言人）による発掘として行われました。調査した貝塚は、「12号貝塚」としていた水子貝塚でも最大の地点貝塚で竪穴住居からあふれる程でした。

10月22日には、東京人類学会の水子貝塚見学遠足会が開催され、約60人の人類学会員やその家族が発掘に参加しました。



23. 東京人類学会・水子貝塚見学遠足会記念写真
くにたち郷土文化館蔵

甲野勇資料。裏面に「プレート←5寸→」と書かれており、人類学雑誌第54巻第11号の巻頭に使用したものです。

24～26. 2次調査風景
くにたち郷土文化館蔵

甲野勇資料に2次調査写真が残されています。24は大応寺境内での休憩風景（中央に座っているのが長谷部言人）、25・26は35mmフィルムのベタ焼きで主に発掘風景。25は裏面に「原寸」と書かれており、人類学雑誌第54巻第11号に掲載されています。26の左から3枚目の中央横向きは和島。



24.



25.

26.



■戦後の研究

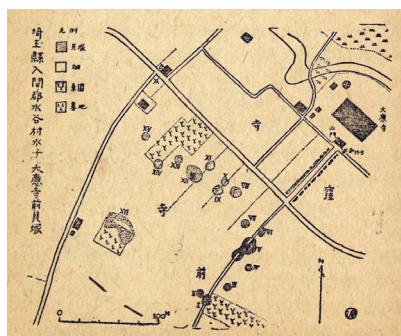
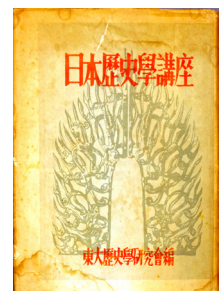
和島は、昭和23年（1948）に「原始聚落の構成」を発表し、縄文時代から古墳時代における集落の変遷を論じました。後に「和島集落論」と呼ばれるもので、中期の尖石遺跡・姥山貝塚とともに、前期の水子貝塚を事例に挙げ、中央に広場をもつ馬蹄形・環状集落が強い規制力による氏族共同体的な集団関係を指摘しました。

酒詰は、一般向けに『貝塚の話』等を著すとともに、全国の貝塚を集成し『日本貝塚地名表』等としてまとめました。水子貝塚を含め富士見市内の貝塚は5遺跡が記されています。

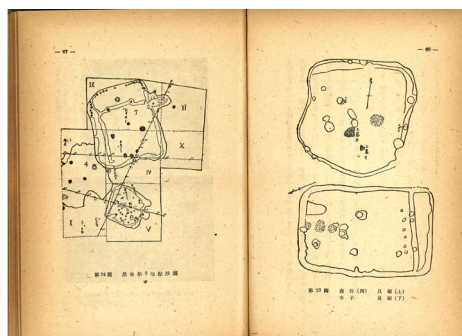
また、江坂輝彌は、土器に繊維を含む黒浜式と含まない諸磯式への過渡期として水子貝塚2次調査の土器を標準として「水子式土器」を設定しました。2次調査の報告がないため下田東3号貝塚、表谷貝塚（横浜市）等の土器が水子式として示されました。



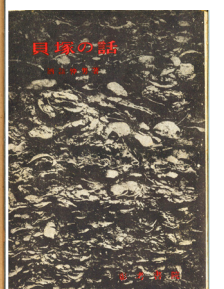
27. 和島誠一 1948「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』 個人蔵（展示は1949年発行）



28. 酒詰仲男・篠遠喜彦・平井尚志編 1951『考古学辞典』 個人蔵
酒詰が書いた水子貝塚の地点貝塚の分布図が掲載されています。



29. 酒詰仲男 1958『貝塚の話』 個人蔵
昭和13年発掘の2号住居の平面図（右ページ下段）などが掲載。

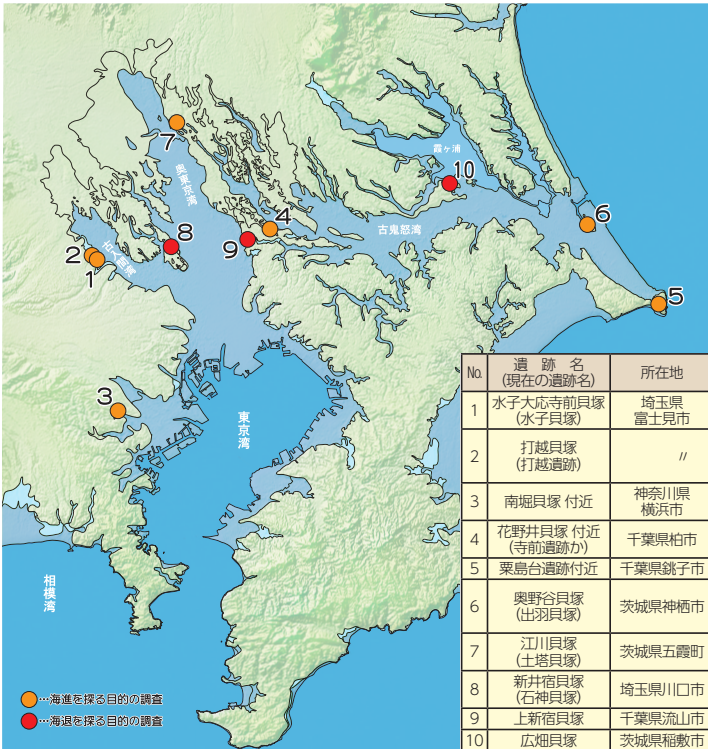


2 国史跡指定へ

(1) 縄文海進研究のための発掘

■第3次調査

戦前の水子貝塚の発掘に関わった和島誠一は、昭和30年代に縄文海進・海退の研究を進めます。和島の所属していた財団法人資源科学研究所（資源研）では、昭和39～41年度の3カ年で「関東地方における自然環境の変遷に関する総合的研究」の一環として、縄文海進の最高海水準を明らかにしようとする研究が行われました。



関東地方の貝塚の中から地域、時期、鹹度などから貝塚が選ばれ、水子貝塚は荒川支谷（古入間湾）の遺跡として打越貝塚とともに調査対象となりました。

打越貝塚は昭和41年（1966）2月、水子貝塚は昭和42年（1967）1月に発掘が行われました。

この研究は、考古学的な発掘だけではなく遺跡付近の低地のボーリング調査も行われ、珪藻化石分析など自然科学分析と総合した研究で、各地の調査データから最高海水準は上限をとっても現在より+3.5m以下であると指摘しました。

30. 資源科学研究所による縄文海進海退調査遺跡

■江川貝塚（土塔貝塚）

茨城県猿島郡五霞町江川にある縄文時代から古墳・古代にかけての遺跡です。現在の遺跡名は土塔貝塚です。利根川・江戸川・中川に挟まれた標高10mの低位台地上に立地します。

昭和39年（1964）8月に1次、昭和40年（1965）12月に2次調査が行われ、前期黒浜式の貝層を伴う竪穴住居跡1軒を調査しました。貝はシオフキ、ハイガイ、オキシジミ、マテガイなどがあります。

平成17年（2005）以降の圏央道建設・区画整理に伴う発掘では、貝層を伴う竪穴住居10軒、土坑・炉穴3基が発見されました。



31. 江川貝塚出土資料 個人蔵
2次調査資料。土器は黒浜式、石器は左から磨製石斧、砥石、磨石。

■奥野谷貝塚（出羽貝塚）

茨城県神栖市奥野谷にある縄文時代前期～中期の遺跡です。現在の遺跡名は出羽貝塚です。標高約6mの砂丘上に立地します。

昭和15年（1940）に和島が、昭和17年（1942）に酒詰が踏査した記録があります。昭和37年（1962）に予備調査、昭和39年（1964）12月～40年1月に発掘し、中期初頭の上部貝層、前期後半・浮島式の下部貝層が確認されたようです。貝は多い順にハマグリ・アサリ・アカニシです。和島が関東地方の縄文海進の最高海水準を検討する契機となった遺跡です。



32. 奥野谷貝塚出土資料
神栖市歴史民俗資料館蔵 56は浮島式。

■打越貝塚（打越遺跡）

埼玉県富士見市水子、水谷 2、東みずほ台 3・4 にある縄文時代～弥生・古墳時代、古代、中世の遺跡です。現在の遺跡名は打越遺跡です。標高約 20 m の武蔵野台地上に立地します。地点貝塚は事前の分布調査により東貝塚と西貝塚の 2 つの分布域が確認されていました。

昭和 41 年（1966）2 月、町教育委員会と資源研が協力して西貝塚で農地改良（天地返し）により露出していた前期関山式の竪穴住居 1 軒を緊急発掘しました。発掘で貝層は発見されませんでした。



33. 記念写真（昭和 42 年 2 月 10 日撮影）

前列左から萩元・戸田哲也・山口・橋本藤七・大沢鷹邇・山田（土地所有者）、後列左から中村嘉男・内田・深谷栄良・加治太三男・和島誠一・大同博（教育長）・朝倉（運転手）。

■水子大応寺前貝塚（水子貝塚）

埼玉県富士見市水子にある縄文時代、古墳時代、古代の遺跡です。氷川前遺跡と隣接します。標高約 18 m の武蔵野台地上に立地します。現在の遺跡名是水子貝塚です。

昭和 42 年（1967）1 月、農地改良（天地返し）に伴う記録保存のための発掘とボーリングによる貝塚の分布調査が行われました。

貝層を伴う前期黒浜式の竪穴住居 1 軒、諸磯 b 式の竪穴住居 1 軒等を発見しました。

ボーリング調査の結果、貝塚は 50 力所確認され、環状にめぐる集落の形態が明らかになりました。

34. 大応寺入口の村史跡標柱（昭和 42 年 1 月撮影）
坂本彰提供

水子貝塚側から大応寺方向を撮影。左端の標柱には「富士見村指定史跡 大応寺貝塚」とあります。



35. 昭和 42 年の水子貝塚 坂本彰提供 中道から北（大応寺）方向。畑が一面広がっていました。



36. 発掘風景

中央正面を向く左は和島誠一、右は大同博教育長。左奥では多くの中学生、高校生が作業しています。



37. 発掘風景（6号住居）



38. 6号住居全景

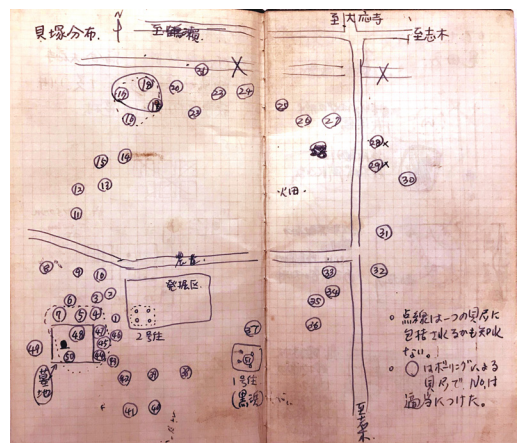


39. 6号住居平面図



40. 新聞記事

調査終了前の 1 月 10 日付けの朝日新聞埼玉版記事。「丸いドーナツ型の環状に貝塚がある集落跡で、(中略) 学術上貴重なものではないかと保存したいと関係者は県や国へ運動」と記されています。



41. ボーリング調査による地点貝塚の分布 坂本彰蔵

ボーリング調査担当者の野帳メモ。国史跡・申請や発掘調査報告書にまとめられる前の地点貝塚の分布が描かれています。



42. 6号住居出土土器
右端の深鉢は現高31.8cm。



43. 発掘参加者記念写真
事務所・宿舎として利用した大応寺本堂前での記念写真。考古学専攻の大学生と高校生や地元関係者が揃っています。



44. 武蔵地方史研究会新年例会後の見学
川井正一提供
大応寺本堂前で撮影。左から北沢浩・坂本彰・川井正一・中村嘉男・甘粕健・和島誠一・十菱駿武・森昭・小宮恒雄・戸田哲也。

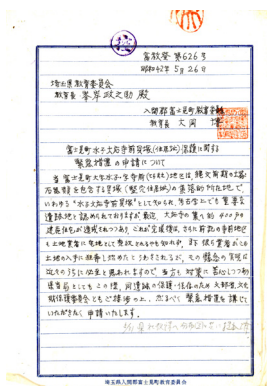
(2) 国史跡指定へ

発掘終了後、町では水子貝塚の地点貝塚を伴う縄文時代前期の集落としての学術的価値を認め、積極的に保存措置の手続きを進めました。昭和42年(1967)5月には県に保存についての緊急措置を要望し、昭和43年(1968)2月には国史跡申請書を提出しました。

この時期は、平城宮跡の保存が決定し、加曽利貝塚の保存運動等が続いており、全国的に遺跡の保存運動が進められていました。水子貝塚についても発掘関係者や文化財保護対策協議会や埼玉考古学会をはじめ多くの団体から保存要望が出されたようです。国史跡申請手続きが進む一方で土地所有者への説明が十分に行われなかったことから

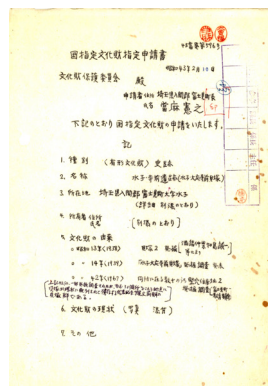
指定への反対運動が起こりました。

こうした中で水子貝塚は昭和44年9月9日の官報告示で国史跡に指定されました。



45. 埼玉県教育委員会への保存要望(控)

発掘の4カ月後の昭和42年5月、考古学上貴重な遺跡であり、周辺の開発が進んできたとして要望書として提出しました。



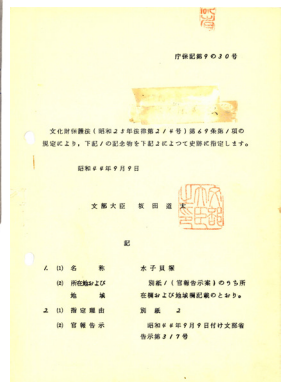
46. 国指定文化財指定申請書(控)

昭和43年2月、国の文化財保護委員会(現在の文化庁)に史跡指定を申請しました。遺跡名は「水子・寺前遺跡(水子・大応寺前貝塚)」でした。

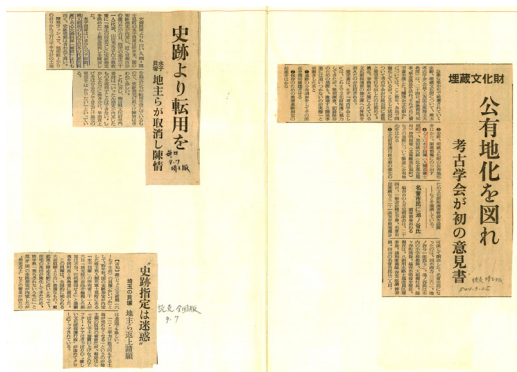


47. 水子貝塚実測図

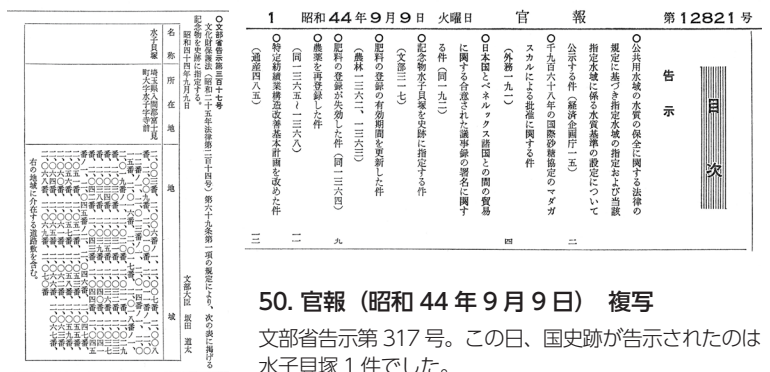
国史跡申請時に添付した図面。環状にめぐる50カ所の貝塚(49カ所の地点貝塚と1軒の竪穴住居)と指定範囲が描かれています。左下には「昭和42年1月小泉功・中村嘉男原図に基づき、昭和43年10月岡田茂弘資料修正」と記されています。



49. 国史跡指定書



48. 新聞記事 富士見市立難波田城資料館蔵
若槻英隆資料。国史跡指定反対に関する記事(左ページ)と史跡公有地化推進の記事(右ページ)。



50. 官報(昭和44年9月9日) 複写
文部省告示第317号。この日、国史跡が告示されたのは水子貝塚1件でした。

3 史跡公園へ

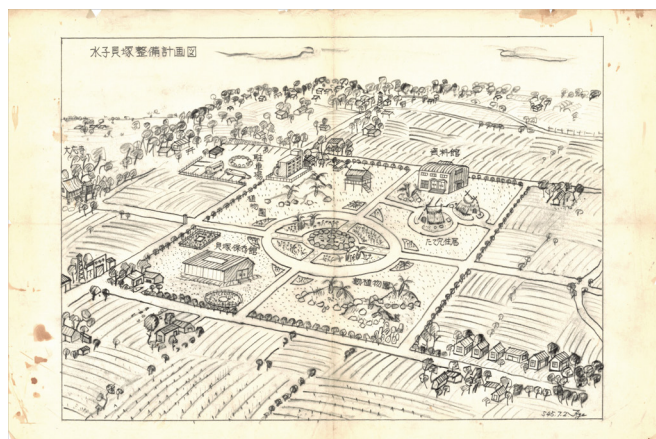
(1) 史跡整備事業の経緯

指定後も国・県・町に対して土地所有者等の史跡指定反対の陳情等が行われましたが、昭和45年(1970)9月には保存への協力が得られることとなり(水子貝塚保存会の結成)、昭和45年度中に公有地化に着手し、史跡整備への第一歩が踏み出されました。

公有地化と並行して史跡整備計画のいくつかの事務局案が作成されました。昭和52年度からは2カ年で水子貝塚保存管理計画事業を実施し、具体的な環境整備計画案を作成しました。昭和58年度からは2カ年で水子貝塚基本計画事業を実施し、保存管理計画の具体的な検討を進め、水子貝塚の保存意義を知る機会とする市民に向けての文化財シンポジウム

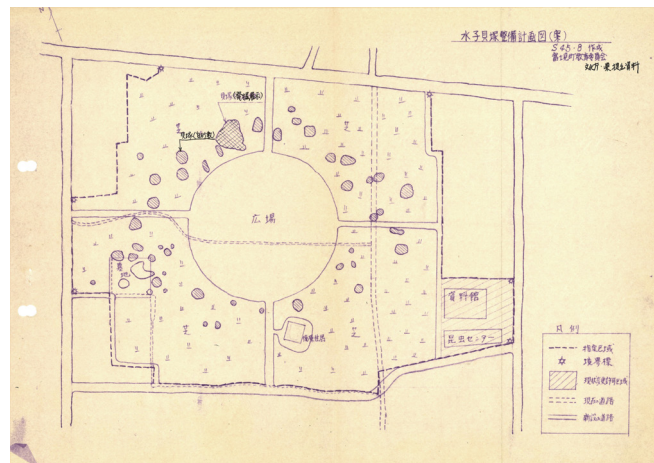
等も開催されました。

地点貝塚が環状にめぐるという特徴を基礎として、広場・復元住居・植栽等を整備するという当初の保存管理計画で示された内容は、平成3年度の基本設計と実施設計までの整備が具体化するまで、大きく変更されることはありませんでした。



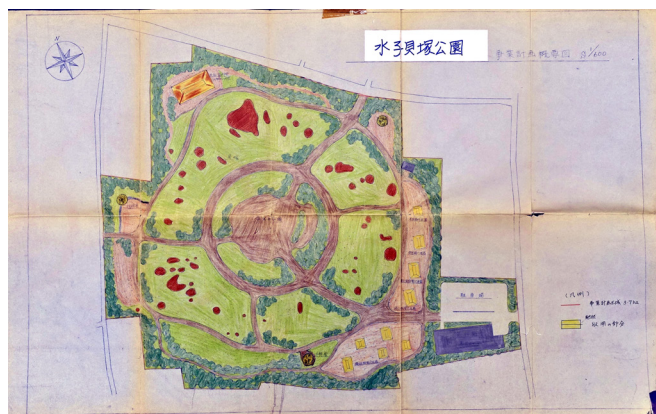
51. 水子貝塚整備計画図

昭和45年に作成されたイメージ図で、指定地内に復元住居・貝塚保存館・資料館・動植物園などが描かれています。



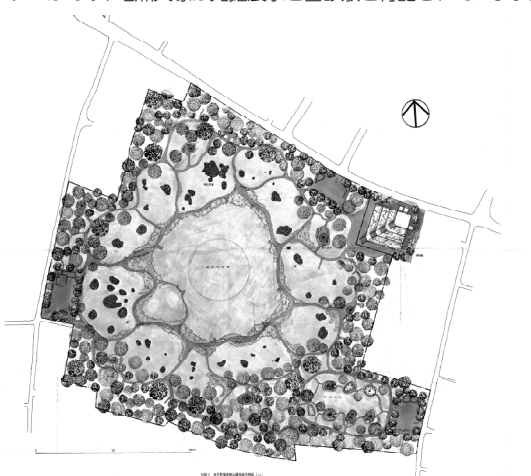
52. 水子貝塚整備計画図

昭和45年、文化庁へ提出の史跡等の環境整備計画の概略設計図として作成されました。復元住居・資料館のほか昆虫センターがあり、地点貝塚は発掘展示と白砂敷と付記されています。



53. 水子貝塚公園事業計画概要図

昭和45年、都市計画決定申請のために作成されました。



54. 水子貝塚史跡公園完成予想図

昭和52～53年度水子貝塚保存管理計画で作成されました。

55. 史跡水子貝塚(ふるさと歴史の広場)鳥瞰図

平成3年の基本設計・実施計画で作成した最終の整備計画図です。

(2) 史跡整備に伴う発掘

■第4・5次調査

保存の決まった水子貝塚での発掘は、必要最小限に留められました。昭和52・53年度は「保存管理計画」策定のために地形測量と地点貝塚の分布調査を実施し、67カ所の地点貝塚を確認しました。昭和58年度は「保存整備基本計画」策定のために再分布調査を実施しました。

■第6次調査

平成2～4年度は史跡整備に伴い展示資料収集、展示館施設建設地等を発掘しました。15号住居からは、良好な貝層と埋葬人骨や犬骨を発見し、水子貝塚を理解する上で貴重な資料を得ることができました。



56. 発掘風景 (昭和59年)



57. 発掘風景 (昭和59年)

一列に並んでボーリング調査。地点貝塚を確認しました。



58. 発掘風景 (昭和59年)

貝層を伴う竪穴住居。確認後は保存のため発掘せずに埋め戻しました。



59. 発掘風景 (平成2～4年)

15・16号住居の発掘。



60. 発掘風景 (平成2～4年)

昭和13年発掘の2号住居を再発掘しました。



61. 発掘風景 (平成2～4年)

H2区ではボーリング調査の精度の確認と貝層以外の遺構を確認するために発掘しました。遺構の存在を確認し埋め戻しました。



62. 発掘風景 (平成4年)

ヘルシーウォーク大会で発掘を見学。左後方は建設中の展示館。



63. 15号住居出土の黒浜式土器

(水子貝塚資料館 2013) より転載。右端の深鉢は現高 20.0cm。



64. 16号住居出土の黒浜式土器

(水子貝塚資料館 2013) より転載。後ろ左端の深鉢は現高 30.0cm。



65. 盛土造成

遺構保護のため平均約50cmの盛土を行いました。



66. 遺構保護した人工地盤上に展示館を建設



67. 展示館(ガイダンス施設)建設地の遺構保護
発見された住居等を保護するため山砂で埋戻しました。



68. 展示館内造形保存展示工事

4 史跡の活用

平成3年(1991)から3カ年で整備した水子貝塚は、平成6年(1994)6月に「縄文ふれあい広場 水子貝塚公園」として開園しました。

そして平成10年(1998)には考古館を史跡隣接地に移転、平成12年(2000)には水子貝塚資料館と改称し、水子貝塚は、資料館、史跡、自然が一体となった野外博物館的施設となりました。

現在は、小中学校の学習の場・地域の憩いの場・地域の特徴ある施設として、資料館で活動する市民団体・市民学芸員(市民ボランティア)・地域団体等との協働で各種事業を実施しています。



69. 完成直後の水子貝塚公園航空写真(平成6年)



70. 水子貝塚公園竣工記念式典



71. 水子貝塚公園竣工記念式典



72. 水子貝塚公園竣工記念式典・記念品



73. 完成直後の水子貝塚公園正門



74. 開園直後の水子貝塚公園(平成6年)



75. 水子貝塚まつり・チラシ(平成6年)



76.



77.

76・77. 水子貝塚まつり風景

富士見市の新名所「水子貝塚公園」を広くアピールするため、平成6年9月10・11日に市と実行委員会の共催で行われ、みずほ駅からの縄文御柱行列、公園では縄文ステージや縄文体験広場等が行われました。

学習の場としては、社会科・理科・総合的学習の授業等で活用され、広い空間は市内外の小学校等の遠足としても利用されています。

資料館事業では、縄文土器づくり・まがたまづくり・竪穴住居の宿泊等体験型の事業を中心に実施しています。

また、調査研究や縄文時代の遺跡をもつ自治体と連携したPR活動も実施しています。



78. 遠足利用 (平成 20 年)



79.



80.

79・80. 社会科学習 (平成 28 年)

市内小学 6 年生の歴史学習では、市民芸員による竪穴住居の案内や学習広場での火起こし体験等を行っています。



81. 資料館事業 (まがたま作り・平成 14 年)



82. 総合的学習 (平成 18 年)

カラムシから繊維・糸づくりを体験



83. 開園 20 周年記念事業 (平成 26 年)



84. 縄文土器の野焼き (平成 28 年)



85. 公園活用事業 (水子貝塚星空シアター・令和元年)



86. 遺跡間交流 (令和元年)

茨城県美浦村陸平貝塚ヨイショの会との交流イベント。



87. PR 活動 (平成 29 年)

羽田空港で縄文文化発信サポーターズのPR活動。



88.



89.

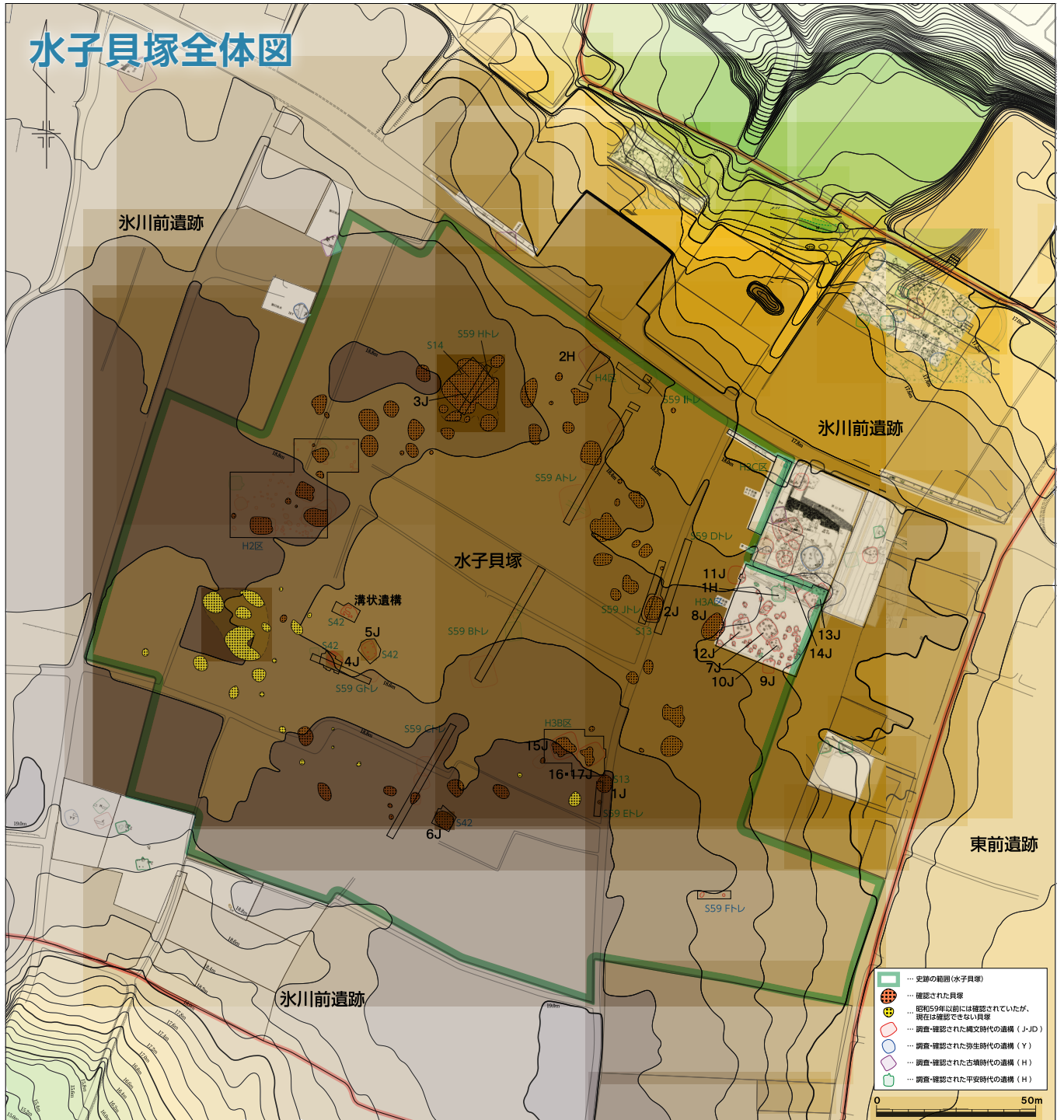
88・89. 調査研究 (平成 12 ~ 15 年)

6 次調査で出土した貝は全て洗浄・分類し、データを取りました。6 次調査出土土器の種実圧痕を観察しています。



90. 調査研究 (令和 2 年)

水子貝塚全体図



水子貝塚発掘調査報告書（1995）の水子貝塚全体図をもとに改変、作成。これまでに確認されている地点貝塚は、76カ所です。

調査	調査年月	調査者	調査目的	概要							
				住居	時期	貝層	備考	住居	時期	貝層	備考
1次	昭和13年(1938)12月	東京考古学会縄文式部会	学術	2軒の貝層を伴う竪穴住居を発掘。16カ所の貝塚が馬蹄形に分布することを確認。							
				1号住居	前期・黒浜式	有	[1号竪穴(1号貝塚)]	2号住居	前期・黒浜式	有	[5号竪穴(5号貝塚)]
2次	昭和14年(1939)10月	東京帝国大学人類学教室	学術	確認されている貝塚のうち最大のものを発掘。							
				3号住居	前期・黒浜式	有	[12号貝塚]				
3次	昭和42年(1967)1月	富士見町教育委員会	農地改良・学術	農地改良に伴う記録保存と縄文海進期研究。50カ所の地点貝塚と中央窪地を確認。							
				4号住居	中期後半?	無	[1号住居]	5号住居	前期・諸磯b式	有	[2号住居]
				6号住居	前期・黒浜式	有	[3号住居]				溝状遺構
4次	昭和53年(1978)6月~	富士見市教育委員会	保存管理計画策定	地形測量・地点貝塚のボーリング分布調査。67カ所の地点貝塚を確認。							
5次	昭和59年(1984)2~3月	富士見市教育委員会	保存整備基本計画策定	昭和13-14年調査位置の確認、遺跡内の自然層の観察、花粉分析等の調査。							
6次	平成2年(1990)12月~平成4年(1992)12月	富士見市教育委員会	史跡整備	2カ所の地点貝塚を発掘し展示資源として活用。展示館建設地の発掘等。							
				7号住居	前期・諸磯a式	無		8号住居	前期	無	
				9号住居	中期・加曾利E式	無		10号住居	前期	無	
				11号住居	中期・加曾利E式	無		12号住居	前期・諸磯a式	無	
				13号住居	前期・諸磯a式	無		14号住居	前期・諸磯a式	無	
				15号住居	前期・黒浜式	有	埋葬人骨・犬骨。	16号住居	前期・黒浜式	有	
				17号住居	前期・黒浜式	無					

水子貝塚の発掘調査と遺構一覧（縄文時代）

この解説シートは、企画展図録・企画展パネルを元に作成したものです。詳しくは企画展図録をご覧ください。